

女性はどうのようにイメージ化されてきたか (4)

——19 世紀英国小説に描かれたジェンダー観——

鈴木 万里

1. 序

前稿¹⁾では 18 世紀に英国小説の女性像に大きな変化が起こったこと、そしてその背景には市民社会の成立に伴う価値観の転換があったことを明らかにした。近代資本主義社会の担い手となった中産階級が信奉したピューリタニズム的価値観は、女性の家柄や身分より、貞節、モラル、適切な振る舞い方を評価したため、女性の行動は厳しく検閲され、わずかな逸脱も許されないようになった。また、理性を重んじる古典主義に代わって、感性や情緒が重視される傾向が強まった。さらに、女性の美は弱さ、繊細さ、内気さにあるとしたエドモンド・バークの定義もまた影響力をもった。その結果、「清らかで、慎み深く、優しく、美しく、か弱い」女性像が確立するに至った。一方で、ピューリタニズムは家庭教育を重視したため、家庭内での女性の役割は重要度を増したが、社会から隔離されることで、女性の立場はきわめて不安定となった。それは、18 世紀末に大流行したアン・ラドクリフのゴシック・ロマンスに象徴的に表れている。擬似的な家の中で様々な暴力や迫害にさらされる女主人公の苦境は、あるじ次第で家の中が無法地帯と化す危険性を示唆している。女性は「家庭」という聖域に囲い込まれる一方、ある意味で退路のない「家」に囚われの状態となったと言える。

ところが、19 世紀に入ると、繊細で感情ゆたかな女性に代わって、賢明で理性的な主人公が望ましい女性像として登場する。ロマン主義全盛の時代、ウォルター・スコットが懐古的な歴史小説を次々と発表し、男性詩人たちが無限の想像力による自己の解放や超越を高らかに歌い上げて独自の世界観を構築していた時期に、女性小説家たちは、醒めた視線で現実を見据えて分別や思慮深さを重視し、自己抑制こそが幸福につながる道であると訴えているのは、興味深い現象である。男女がいかに異質の世界に生きていたかを物語るものと言えよう。見方を変えれば、家庭以外に女性の居場所はないと

の認識（または諦念）が浸透し、それならば、家庭こそが女性にとって力を発揮できる場であると肯定的に解釈して、望ましい家庭のあり方やそれに相應しい女性の生き方を模索しようという建設的な姿勢がうかがわれる。1810年代までは、賢明で分別のある女主人公が、周囲の女性や家族の生き方に引きずられることなく、忍耐強く節度ある生き方を貫いて、自分の居場所（＝家庭）を手に入れるという小説が多い。その中から代表的な作品として、マライア・エッジワース『ベリンダ』(1801)、ジェイン・オースティン『分別と多感』(1811)、スーザン・ファリャ『結婚』(1818)を分析し、そこに込められたメッセージを探ることとする。

19世紀半ばになると、「女性の領域＝家庭」に違和感を覚え、自分の意志や価値観を確立しようと苦闘する女性たちが目立ち始める。なぜ、彼女らの意志は「家庭」と相容れなかったのか、どのような解決策がとられたのかを、シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』(1847)、エリザベス・ギヤスケル『ルース』(1853)を中心に考察する。

1860年代には「煽情小説」(Novel of Sensation)が大流行した。これは、極端な状況や謎めいた展開、振幅の大きな感情などを特徴とする娯楽性の高い小説である。この中には、女性がさまざまな事情から家出や夫殺害、復讐を企てるというセンセーショナルな内容をもつ作品が多く含まれる。ここでも女性と「結婚」もしくは「家庭」との関わりが重要な設定となっているが、もはや合法的な解決法では現状を打開できないとの閉塞感が、極端な行動や筋立ての根底にある。当時特に人気の高かった作品、ヘンリー・ウッド夫人『イースト・リン』(1861)、メアリ・エリザベス・ブラッドン『オードリ卿夫人の秘密』(1863)を対象に分析を試みる。

本稿では、上記の3つの時期の小説に描かれた女性像を比較検討することによって、ヴィクトリア朝(1837-1900)半ばまでの女性をめぐるイメージの変化と、それを支えた社会背景について論じることとしたい。

2. 19世紀初め

1) マライア・エッジワース『ベリンダ』*Belinda* (1801)

マライア・エッジワースはウォルター・スコットとともに当時最もよく読まれた小説家のひとりで、女性の教育に関する著作や子供向けの教訓的な物語の作者としても知られていた。『ベリンダ』はジェイン・オースティンが

『ノーザンガー・アベィ』第5章の中で、人間性についての優れた知識が示されていると高く評価している作品でもある。教訓的な色彩が否めないが、感性や感情よりも知性や理性を重視する点が大きな特徴をなし、感性重視の18世紀とは一線を画していることがうかがわれる。

ベリンド・ポートマンは美しく賢明で教養豊かな女性で、良縁をと願う伯母のはからいで、ロンドンの社交界で流行の先端をいくデラクァ子爵夫人のもとに寄寓することになる。ベリンドは常に理性的に振るまう堅実な思考の持ち主で、子爵夫人の派手な交際や浪費生活、社交界での勢力争い、屋敷に出入りする愚かな貴族たちには批判的の目を向ける。しかし、子爵夫人の秘密の苦悩（乳ガンを患い、阿片を常用。後に誤診であったことが判明する）を知ると、細やかな配慮を見せて、決して見捨てないと約束する優しさも持ち合わせている。世間の賞賛にもかかわらず、夫婦仲も悪く娘とも別居し家庭的幸福を得られない夫人を見て、ベリンドは上流夫人の生き方は自分には馴染まないと判断し、小遣いを節約して堅実な生活をと心がける。しかし一方で、夫人が夫や娘、義母と和解するための尽力は惜しまない。一時はベリンドが自分の死後に夫の後妻の座を狙っているのではと疑って嫉妬に苦しんだ夫人も、やがてベリンドに全幅の信頼を寄せるようになる。ベリンドが唯一、尊敬に値する男性として心惹かれたクラレンス・ハーヴィーは、知的で洗練された誠実な人物として描かれる。しかし、彼がヴァージニアという恋人を隠しているという噂を耳にしたベリンドは、自分を戒め、クラレンスに心を奪われないよう防御を固め、節度ある態度を崩さない。やがて、西インド諸島出身のオーガス・ヴィンセント氏と知り合い、次第に好意をもつようになり、求婚に応じるが、彼が賭けに手を出していると知ったベリンドは、危険な遊びに耽る男性との幸せな結婚生活はありえないと、ただちに破談にする。その後、デラクァ子爵夫人の尽力で複雑な事情が明らかになり、すべてが解決して、ベリンドはクラレンスとめでたく結ばれることになる。

ベリンドの生き方で強調されているのは、賢明さ、思慮深さ、分別、節度、理性、忍耐などであり、自己抑制こそが女性にとって幸福への道とされていることが明らかである。理性的なベリンドとは対照的に描かれているのが、純真で感受性豊かなヴァージニアである。気取ったパリの女性たちに嫌気がさしたクラレンスはルソーの著作に傾倒し、『エミール』のソフィアに倣って、無垢な少女を教育して理想的な妻に仕立てることを夢見る。田舎で偶然出会った身寄りのない美少女レイチェルを引き取り、世話係をつけてヴァージニアと名付けて密かに教育する。ヴァージニアは内心クラレンスを恐

れており、受けた恩には感謝しながらも恩人を十分に愛していないと罪悪感を抱く。クラレンスとの結婚には気が進まないが本心を隠して苦しみ、義務感から一旦は求婚に応じる。彼女は典型的な「感受性の人」であり、ロマンスに夢中になり、悪夢にうなされ、思いに沈み、失神したり、狂気の兆候を見せたりする。クラレンスは次第にヴァージニアを物足りなく感じ始め、ベリンダと知り合ったことがきっかけで、知性、教養、理解力を備えた対等の女性を高く評価するようになる²⁾。やがて、理想的な妻を教育するという計画を後悔するが、すでに手遅れでヴァージニアの名誉のために求婚せざるを得ないと判断する。

ベリンダとヴァージニアを対比させることによって、作者は、知性や理性が女性にとって重要であるばかりでなく、男性にとっても、女性の知性は相応しい伴侶として不可欠の要素であると主張している。「知的で対等なパートナー」と、「家庭的幸福」の重要性はこの小説のテーマと言える。これは、パーシヴァル夫妻の家庭生活で一層具体的に例証される。ヘンリー・パーシヴァルとその妻アンは対等な知性と理解力をもち、関心事を共有している理想的な夫婦である。ヘンリーは同性の友人に話すのと同様の話題を妻と論じることができ、また、自分の思索のために自室に籠もる必要はなく、あらゆる仕事や考えを妻と分かち合う。子どもたちも奴隷やおもちゃでなく、理性的存在として扱われ、自分で考え、責任ある行動をとることを学ぶように導かれる。このような理想的な家族を見て、ベリンダは家庭生活こそが幸福を生み出すと確信する³⁾。パーシヴァル夫妻と対照的に描かれるのが、デラクァ子爵夫妻である。夫人は美しく才気ある女相続人で、かつて多数の崇拜者に囲まれていたが、容易に支配できる相手を選んだつもりでデラクァ子爵と結婚する。ところが、馬鹿者は支配できないことがわかって後悔する⁴⁾。子爵の方でも妻に支配される男と思われることは我慢ならない⁵⁾ので、意地の張り合いや当てつけを繰り返し、このふたりが和解し歩み寄るのは、結婚後15年近く経て後、ベリンダとクラレンスの尽力によってである。

理性重視の主張は、初恋信仰が家庭の幸福には危険だとするパーシヴァル氏の意見にも反映している。すなわち、若い頃に詩やロマンス小説などから恋愛のイメージを作り上げて、それを投影してしまいがちなので、対象の本質的な長所よりも、偶然性に左右されることの多い初恋は、幻が続くうちは至福をもたらすが、消えれば絶望しか残らないと分析される⁶⁾。実はパーシヴァル氏の初恋の相手は独身時代のデラクァ子爵夫人であったので、不確かな初恋ではなく、慎重に相手を見定めた上での思慮深い結婚が幸福への道で

あることを、彼は身をもって証明したことになる。

理性が人格の重要な構成要素であるのは、女性のみならず男性にも当てはまる。ルソーかぶれのロマンティストであるにもかかわらず、クラレンス・ハーヴィは理性と名誉を重んじる人物であるとされる。それゆえに心惹かれるベリンダへの思いを押さえて、理性に従ってヴァージニアに求婚する決断に至る⁷⁾。一方、ヴィンセント氏は“not to feel was not to live”⁸⁾と公言するほど「感情の人」であり、密かにギャンブルに熱中するのも強い刺激を求めて感覚を満足させることに喜びを見いだす傾向ゆえと説明される。ベリンダが躊躇なく彼との婚約を解消するのも、危険な遊びに耽るほど理性的な判断力を欠く男性は、幸福な家庭生活を共にする伴侶としての適性がないと冷静に結論づけたためである。

以上のように、エッジワースは、女性を繊細、感情的、従順、脆弱で、知的に劣る存在と定義した18世紀の価値観に異議を唱えて、知的で賢明な女性たちを描くことで、男性と対等の関係を築く可能性（あくまで慎み深さや節度の許す範囲内ではあるが）を提示した。女子教育に関する著作の中でエッジワースは、「感性を抑制し、知性を養う」必要性を主張している⁹⁾。「自分の意見をもつために本を読む」¹⁰⁾というベリンダの姿勢は、自己研鑽とともに、むやみに人に従うのではなく「自分で考える」ことの重要性を物語っている。ただし、エッジワースの考える女性の目標は「穏やかで家庭的な美德の日々の実践」であり、男女の対等の関係も家庭内に限定されるものであって、社会での女性の活動や地位の向上までは視野に入っていない。にもかかわらず、「知的で賢明な女性像」を提示したことによって、家庭内での女性の立場や役割への再考を促し、オースティンやファリャなど後の小説家に大きな影響を与えることになったのである。

2) ジェイン・オースティン『分別と多感』 *Sense and Sensibility* (1811)

「知性」と「感性」という18世紀文学にしばしば取り上げられる対立概念をそのまま題名としたオースティンの長編第1作は、「分別」と「多感」という対照的な特徴をそれぞれエリナとマリアンという姉妹に当てはめて描いている。そして、感情過多で天真爛漫で傷つきやすいマリアンよりも、自制心があり賢明で思慮深いエリナの方が、明らかに高い評価を与えられており、知性重視という意味で『ベリンダ』の延長線上にあると言える。しかし、単に姉妹を対比的に描きわけに留まらず、作者は議論を一步進めて、

「分別」をさらに詳しく分析している。

すなわち、分別とは現実を見極め様々な問題に対処する能力でもあるが、それが良識や健全なモラルと共存しない場合には、打算的な利己主義に陥りやすい、ということである。この作品では、頭がよく自己中心的で薄情な女性が身近な男性を思い通りに支配することで、周囲の人々を著しく傷つける。ファニー・ダッシュウッドは、夫の虚栄心や人の良さ、思考力のなさをうまく利用して、夫が異母妹たちに父親の遺産を少しも分けてやらないようにし向け、エリナたちは窮乏生活に陥る。また、野心家のルーシー・ステールは、4年前内密に婚約したエドワード・フェラーズの心が自分から離れたのを知って、恋敵エリナに近づき、自分の悩みを打ち明けると見せかけて、巧妙に牽制してエリナの希望をくじく。しかも、息子の不釣り合いな婚約に激怒した母親フェラーズ夫人がエドワードの相続権を次男ロバートに移すと、土壇場でエドワードを捨ててロバートに乗り換えるという無節操な離れ業を実現する。その上、フェラーズ夫人にうまく取り入ってお気に入りになるという見事な手腕さえ見せる。人の心をつかみ、自分の思い通りに有利に事を運ぶ術を心得たルーシーは、周到な策略をめぐらせ、忍耐強く機会を待つという意味では、利口で自制心を備えた女性である。しかし、誠実さや正直さ、思いやりを持ち合わせないずる賢さは、愚かさ以上に深刻で、始末が悪い。ここで作者は、‘sense’（分別・知性）の判定基準を具体的に定義している。

ルーシーは ‘some kind of sense’¹¹⁾ 「ある程度の知性」をもち、‘clever’¹²⁾ 「利口」ではあるが、せっかくの知性が教育によって磨かれず、知的鍛錬が不足していることが指摘されている。‘ignorant’ 「無知な」 ‘illiterate’ 「無学な」という言葉は、知性を伸ばす教育の欠如を示している。が、それ以上に重要なものは、広い意味でのモラル意識や良識である。ルーシーには、‘the thorough want of delicacy, of rectitude, and integrity of mind’¹³⁾ 「思いやり、正直さ、誠実さがまったく欠落している」と分析される。その結果、‘artful’ 「ずる賢く」で、‘selfish’¹⁴⁾ 「利己的」と称される。それに対して、エリナの知性は、単に賢明で思慮深いのみならず、健全なモラルに支えられ、常に周囲の人々に細やかな配慮を示しつつ、自分で考え判断して行動する。心惹かれるエドワードが密かにルーシーと婚約していたことを知った時にも、自分の落胆以上に、エドワードの前途を本気で案じ、彼のために泣く¹⁵⁾。しかし、自制心を働かせて自らの苦しみを家族に知られないように振る舞い、ひとりで耐える。その際、心の支えになっていたのは、「自分の義

務を果たしているという気持ち」¹⁶⁾であった。エリナにとって、責任感と思いやりが行動の指針となっていることがわかる。そして、これこそが本当の「知性・分別」とされている。

一方、喜怒哀楽を隠せない純真な妹マリアンは、初めての恋に破れて深く傷つき、嘆き悲しんだ挙げ句に重病に罹り、衰弱して死の淵まで行く。心優しく感情の激しいマリアンは「感性」の見本のような性格で、きわめて魅力的だが、わがままで情緒的に不安定で、周囲が見えないために独善的になりがちである。妹の繊細で起伏の大きな情緒と対比的に描かれる姉エリナの堅実な良識と的確な判断は、この小説の倫理的な柱となっている。

理性重視の主張は、『ベリнда』同様に、初恋信仰への批判もしくは揶揄としても示される。マリアンの初恋は、相手ウィロビーの卑劣な裏切り行為によって終わりを告げ、その痛手から立ち直るのには、長い時間と周囲の人々の献身を要する。また、エドワードは、20才で内密に婚約した時には優しく気だてがよいと思われたルーシーに次第に幻滅し、エリナと知り合ううちに、自らの無分別な選択を深く後悔するが、責任感ゆえに最初の婚約に縛られて、将来への望みを失う。また、ブランドン大佐の初恋も悲劇的な結末を迎え、現在にも影を落としていることが語られる。それぞれ状況は異なるものの、若い頃の一途な情熱は、適切な判断や思慮を欠く行動に結びつきやすく、後悔や不幸を招くことが示唆される。唯一、エリナの初恋が成就したのは、的確な判断とたぐいまれな自制心、相手の人格への揺るぎない信頼によるものである。妹マリアンの目から見れば、エリナの好意の示し方はあまりに慎重すぎて、「薄情」「cold-hearted」¹⁷⁾と映るにせよ、相手の知性や善良さ、趣味や人柄などを徐々に理解して、敬意と信頼感を育てていく方法は、最も確実で長続きする愛情につながるものと考えられている。

本来、知性や判断力に優れているはずの男性側の誤算と軽はずみな行為が、本来の恋愛の成就にとって大きな障害になるという構図は、『ベリнда』のクラレンス・ハーヴィーの一件にも通じるものがある。これは、女主人公ベリндаやエリナの賢明さや思慮深さを際立たせる効果をもつ一方、男性側の恋愛沙汰には比較的寛容であった当時の二重基準ゆえの設定でもあったに違いない。また、男性の優位性を自明のものとする社会通念に対する風刺もこめられていると考えられる。

3) スーザン・ファリャ『結婚』 *Marriage* (1818)

ジェイン・オースティンとほぼ同時代のスーザン・ファリャ (1782-1854) は、ウォルター・スコットに後継者と見なされるほどに高く評価されたスコットランドの小説家で、写実性と風刺を特色とし、『結婚』の他に *The Inheritance* (1824), *Destiny* (1831) と計3作を残している。

『結婚』も『ベリンド』や『分別と多感』同様に、理性的で賢明な女性像が描かれ、自己抑制が幸福への道であることが提示される。

父コートランド伯爵に、L公爵との気の進まぬ縁組を命じられた17才のジュリアナは結婚数日前に恋人ヘンリ・ダグラスと駆け落ちする。無断欠勤ゆえに軍職を失ったヘンリはやむを得ず、妻を連れてスコットランドの親元に身を寄せるが、わがままで贅沢なジュリアナは厳しい風土や見慣れぬ食べ物、純朴でお節介な伯母たちに我慢できない。やがて双子の女の子を産むが、子どもに無関心なため、見かねてヘンリの兄嫁アリシアがひとり引き取って育てることになる。もうひとりにはジュリアナのもとで育つ。ヘンリは後見人に泣きついて復職を果たし、ようやく妻の希望通りロンドンに帰る。ジュリアナは浪費生活を再開し、ヘンリは後見人に見放されて相続権を失い、たちまち借金が嵩んで投獄される。コートランド伯爵が亡くなって後を継いだジュリアナの兄の助力で、ようやく牢を出たヘンリはインド駐在軍に配属され赴任する。ジュリアナはロンドンを離れる気はなく、兄の家（元の実家）に寄寓して気ままな生活を続ける。

一方、伯母のもとで育ったメアリは賢明で良識的な娘になるが、祖父の死をきっかけに沈みがちで健康を害したために、転地を兼ねて母親のもとにしばらく滞在することになる。コートランド伯爵も健康がすぐれず、バース近郊の地所ビーチ・パーク邸に転居を決める。兄伯爵の妻が家出・駆け落ちしたため女主人気取りのジュリアナは、資力がないのでやむなくロンドンでの生活を諦めて兄についていく。はるばるスコットランドから旅して母親に再会したメアリは感激のあまり倒れてしまうが、娘に関心のないジュリアナは不機嫌で冷淡、双子の姉アデレイドもメアリを無視する。ふたりの振る舞いを不当と憤り、親切にしてくれるのは従妹のエミリだけである。母を尊敬するのが娘の義務と考えるメアリは、母に教会での礼拝を禁じられたり、財産ある貴族との縁談を勧められたりして、ことごとく母の意志に背くことに悩むが、自分の幸福に関わることで譲らない。野心家のアデレイドは従兄のリンドールと相思相愛だったが、アルタモント公爵がメアリに求婚するつも

りと知って嫉妬心にかかれ、公爵の関心を奪うことに成功し、首尾よく結婚を果たす。虚栄心の強いジュリアナは娘の良縁に有頂天で夫の訃報も意に介さないで、メアリは心を痛める。また、メアリは時折訪問する盲目のレノックス夫人の息子チャールズと次第に心を通わせ合い、やがてひそかに婚約するが、母親ジュリアナに反対されて、忍耐強く待つ。他方、公爵夫人となったアデレイドは華やかだが窮屈な生活と頑固な夫に嫌気がさし、結婚後1年ほどで従兄リンドールと駆け落ちして、大騒動を引き起こすが、まもなく南フランスでふたりは結婚する。やがて退屈したアデレイドに呼ばれ大喜びでジュリアナは娘に合流し、メア리를省みない。その後、複雑な事情が解決してようやくメアリはチャールズと結婚してスコットランドに落ち着き幸福に暮らす。エミリも幼なじみの従兄（メアリの弟）と結婚して、そのまま父の家に留まる。

別々に育った双子の姉妹が対比して描かれる『結婚』は、教育の重要性和家庭的美徳の称揚が主なテーマと考えられる。アデレイドとメアリの対照的な性格や人格は、それぞれを育てたジュリアナとアリシアという、いずれも母親を早くに亡くしてロンドンの上流家庭で育ち、正反対の人生を選んだふたりの女性に負っている。無分別でわがままなジュリアナは恋愛を信じて駆け落ちしたものの、自分の望む贅沢な生活ができずに幻滅し、夫への愛情も関心も失い、インドに赴任する夫とは別居し兄に依存して気ままに暮らす。アデレイドは母に似て虚栄心が強く愚かで薄情な娘に育つ。一方、アリシアは、謹厳な伯母のもとで従兄のエドマンドと一緒に育ち、やがてふたりは愛し合うようになる。ところが、溺愛する息子に有利な結婚をと願う伯母に反対されて、エドマンドは母親と決裂、アリシアは身を引き、スコットランドの父方の祖父のもとに赴く。2年後に成年に達したエドマンドから求婚に来るとの手紙を受け取ったアリシアは、恩ある伯母の同意が得られぬ結婚は不幸と断り、当時求婚していたダグラス大佐を受け入れる。ふたりは農場経営に力を合わせ、平穏な幸せを実現する。アリシアに育てられたメアリは、忍耐強く真面目で誠実な娘になる。作者はアリシアやメアリの理性や自己抑制が女性にとって真の幸福への道であるとのメッセージを伝えようとしている。

ところが興味深いことに、この図式的な教訓には収まらないふたりの女性たちが重要な脇役として配されている。ひとりメアリの従妹エミリである。母親は家出して駆け落ちし、怠惰な父コートランド伯爵と利己的な叔母ジュリアナや野心家の従姉アデレイドに囲まれて育ったエミリは、適切な教

育不足ゆえに自己抑制を欠いているものの、率直で洞察力に優れ、正義感の強い娘として登場する。メアリに対する母ジュリアナや姉アデレイドの不当な扱いに怒り、ふたりの愚かさを遠慮なく批判し、チャールズのメアリへの好意にいち早く気づく。母親の反対にあって結婚に踏み切れないメアリやチャールズの忍耐強さにあきれるエミリは、読者の反応を代弁しているように思われる。慎重深く思いやりのあるメアリがあえて言葉に出さない本音を、エミリは辛辣に指摘する。もうひとりの個性的な女性マクラフラン夫人で、病弱で愚かな夫サー・サンプソンの面倒を見ながら、精力的に活動する。ぶっきらぼうで粗野だが、賢明で判断力、行動力をともに備えている。夫が不当にもチャールズの父親から奪った相続権を復活させ、夫の死後チャールズが財産と地所を取り戻せるよう尽力する。夫の意志に反しても自分の正しいと判断することを実行する夫人は、決して女性として見習うべき人物として描かれてはいない。しかし、チャールズとメアリが結婚後、財産を得て安定した生活を送れるのは、この変わり者の女性のおかげである。慎重という枷に縛られずに、矛盾を指摘し、不正をただすことを躊躇わないこのふたりの個性的な脇役を通して、アリシアやメアリのように模範的な女性は、美德ゆえに行動を阻まれ、無力であることが暗示されている。

またこの作品でも、保護者であるべき男性の登場人物は責任感に欠け、存在感が希薄である。ジュリアナの夫ヘンリ・ダグラスは無分別、コートランド伯爵（父）は専制的、コートランド伯爵（兄）は怠惰で無頓着、その息子は洗練された人気者だが道徳心を欠き、ジュリアナの息子エドワードは人柄はよいがあまり賢明でない。メアリが愛するチャールズでさえ、真面目で誠実だが印象が弱く個性に欠ける。作者が男性全般に不信感を抱いていることがうかがわれる。このような社会では、分別ある理性的な結婚によって、賢明な女性を中心となって家庭を運営することが最も妥当な生き方であるという、諦念を込めたシニカルな認識が背後にあるものと考えられる。

女子教育に関する議論・知性重視

18世紀の感性崇拜から一転して、19世紀初めの女性作家たちが理性や知性を強調した背景には、女子教育に関する様々な議論があった。

それまでは、女性には知的能力において男性に劣り、本当に大切な仕事には適さないというのが一般的な考え方であった。従って、施される教育内容もまったく異なっていた。女性に対しては、針仕事や読み書きなどの実用的な

教育以外に、有利な結婚をするための「たしなみ」‘accomplishment’と呼ばれる、フランス語、ダンス、音楽、絵画などの教養的な内容を中心に行われた。当時の女子教育を批判したハナ・モア（1745-1833）でさえ、男性は論理的だが、女性は感覚的で視野が狭く直感的であると資質の違いを当然視しており、女性は深遠な知的学習には不向きであるという「常識」を受け入れていた。キャサリン・マコーリのように男女に同じ教育をと主張する意見もあったものの、きわめて少数派であった。しかし、一方でハナ・モアは「学ぶことの大きな効用は、自分自身の心を律することができ、他人の役に立てるようになること」¹⁸⁾と述べており、学習を自己抑制への有効な訓練と見なしていた。

一方、結婚は女性が世間で出世しうる唯一の方法であるために、結婚市場での価値をつり上げるために行われるたしなみ教育が、女性の向上心や独立心を失わせ、墮落させていると警告したのが、メアリ・ウルストンクラフト（1759-1797）である。『女性の権利の擁護』（1792）では、教育の平等を説いて、ルソー、フォーダイス、クレゴリーら18世紀の女子教育に強い影響力をもった著述家たちによる教育論を批判している。ウルストンクラフトの主張は、女性の教育のみならず、職業の自由、政治参加、財産権を含めて、女性の経済的自立と精神的自立（このふたつは不可分とされる）の必要性に至るまで、現状分析や差別構造の実態把握も含めて幅広く展開されている。当時としてはあまりに革命的な提言であって、共感を得るには至らなかったとされる。しかし、彼女が繰り返し強調しているのは、理性を磨いて美德を身につけ、個人がそれぞれの義務を果たすことで、家庭内や社会で協調的な関係を築くという、きわめて倫理的な規範とそれに基づく生活実践である。そして、結婚は社会の基盤であり、妻は奴隷や情婦としてではなく、人間としての愛情と理解の上に関係を築くべきという、対等のパートナーシップをめざしている。女性は男性に仕えるために造られたという考え方が主流だった当時としては画期的な提言であった。対等のパートナーとなり得るように、女性は自分の義務を正しく理解し、それをどのように果たすかを自分で考えることができるように教育されるべきだというのが、ウルストンクラフトの主張であった。このような夫婦の対等な関係や女性の知性重視の傾向は、その後の小説家に受け継がれていったと考えられる。

しかし、ウルストンクラフトの死後出版された夫ゴッドウィンの回想録によって、彼女の生涯が当時の中流女性の倫理基準から大きく逸脱していたことが明らかになり、¹⁹⁾「ペチコートをはいたハイエナ」と罵られるほどに評

価が急落した。その後、ウルストンクラフトを支持することは不道德と受け取られかねない状況ができていった。さらに、フランス革命後の反動的な政治体制は、急進的な思想を抑圧し、人権や権利の主張が危険視される傾向が強まり、ウルストンクラフトの作品には不利に働いた。出版された時には概して受け入れられた『女性の権利の擁護』は1798年以降、激しい非難の対象となったという²⁰⁾。従って、その後の女性小説家たちは、女性解放を訴えることなく、保守化した社会に適合した形で女性の生き方を探る道を選んでいかざるを得なかった。その際に女性の教育は、重要な主題として引き継がれた。そしてキー・コンセプトが「知性と分別」であったと考えられる。ただし、19世紀初めには、ウルストンクラフトとの決別を明確に示すことが、リスペクタブルな女性作家としての必要条件であった。それゆえに、彼女らはウルストンクラフトの主張である「知性重視」や「対等のパートナーシップ」というテーマを受け継ぎながらも、急進的な色彩を帯びないように（意識的にせよ無意識のうちにせよ）、「賢明な女性」による「家庭の幸福」という、平和で穏当なイメージを強調し、さまざまな工夫を凝らしていったのである。

例えば、『ベリンダ』では、「女性の権利の擁護者」と自認するフリーク夫人が登場する。女性の領域に留まることを拒否して、狩りや決闘や賭けをする男装の夫人は明らかにウルストンクラフトを戯画化して描かれている。彼女は、ベリンダの良識や賢明さを際立たせる効果をもつと同時に、作者がウルストンクラフトの主張とは一線を画していることを明示するために配されたと考えられる。ウルストンクラフトが女性の精神を墮落させる元凶であると批判した「たしなみ教育」についても、『実用的な教育』の中で、エッジワースは女性の置かれた現状を考慮すると一概に無意味とは言えないと、受け入れる立場を示している。「たしなみは……社交界に仲間入りするための入場券になる……若い女性が結婚において幸運をつかむ機会を増やす……退屈に陥らないような備えとしての価値ももっている」²¹⁾ 結婚しか道がなかった中流の女性たちの立場と、ようやく手に入れた結婚生活も退屈な時間を持て余すことになるという暗い見通しを踏まえると、「むなしく過ごしたという惨めな思いをしないですむような趣味を育てることを是非とも奨励すべき」というシニカルな認識に達するのも当然と言えるであろう。一方、ジェイン・オースティンは、ウルストンクラフトに関して一言も言及しないことで、距離を取る姿勢に徹した。にもかかわらず、ふたりの考え方には共通項が多いことが指摘されている²²⁾。アン・メラーの言葉を借りれば、「奴隷状

態にある中流の女性たちは、せいぜい寛大な夫を慎重に賢明に選んで、好きにさせてもらえるようにするのが最良の生き方²³⁾ということになる。また、『結婚』に登場するマクラフラン夫人は、率直で判断力も実行力も備えた「ウルストンクラフト的」イメージの人物である。女性的なデリカシーとは無縁で、メアリにとっては苦手な隣人であるが、彼女の英断により、かつて夫が親戚から奪った相続権が正当な子孫の手に戻ることになったのである。夫の意志に反する行為をも辞さない公正さや大胆さは、控えめな妻には決して期待できない資質である。女性らしい慎ましさを守ることで、失うものもあるというメッセージを、ファリャはマクラフラン夫人の行動を通して伝えたかったのかもしれない。

同時代の男性詩人たちは、想像力による飛翔、遠い世界への憧憬、官能的な愛を高らかにうたって独創的な世界を創り上げた。それに対して女性作家たちは、良識的な価値観を守ることによって家庭という限られた世界での平安をいかに手にするかという、きわめて散文的な視点に固執しているように見える。なぜなら、男女の活動領域が厳格に分割されていた当時の女性たちにとっては、「今、ここ」しか描くべき世界がなかったからである。エッジワースは次のように述べている。「公的場面で女性が男性と対等につきあえるようになるには、社会の慣習がすっかり変わらなければならない²⁴⁾」このような厳しい現実認識と、ウルストンクラフトがめざした女性解放運動が頓挫した記憶とが、閉塞感と一種の諦念を生みだし、風刺をこめた現実路線の作品群へとつながったと考えられる。しかし、「分別と知性」を重視し、「対等なパートナーシップ」の実現を繰り返し描いたエッジワース、オースティン、ファリャが、いずれも実生活では結婚を選ばなかったという事実は、皮肉にもそのような理念の実践が、いかに困難であったかを語っていると判断せざるを得ない。

3. 19世紀半ば

1) シャーロット・ブロンテ『ジェイン・エア』 *Jane Eyre* (1847)

この作品は、怒りや反逆精神という、当時の女性には無縁とされた感情を初めて率直に描いた点が画期的とされ、かつてロマン派の男性詩人たちがうたった激しい情念や独自の価値観を取り込んだことでも知られている。しかし意外にも、「知性と分別」および「自己抑制」を女性の行動規範にすべき

という 19 世紀初めの女性作家たちのメッセージは、ここでも確実に受け継がれている。

子ども時代に見せる激しい反抗や憤りにもかかわらず、成長後のジェインは、理性的で思慮深く慎み深いことが、複数の登場人物を通して語られる。ロチェスターは、一目で彼女の ‘gravity’ (真面目さ) ‘considerateness’ (思いやり) ‘caution’ (用心深さ)²⁵⁾ ‘discretion’²⁶⁾ (思慮深さ) を認めるし、後にジブシーの老婆に変装した時には、ジェインの顔つきから、理性がしっかり手綱を握って感情を制御し、判断力が情熱や欲望を抑えて優位に立っていることを的確に指摘する²⁷⁾。その後彼の懇願を振り切ってソーンフィールド邸を去るジェインの苦悩と葛藤はこの予言と、並はずれた自己抑制を裏付けている。また、フェアファックス夫人は ‘discreet’ (思慮深く) ‘thoroughly modest’ (とても慎み深く) ‘sensible’ (分別がある)²⁸⁾ とジェインを見ている。そして、ロザモンド・オリヴァーからは ‘good’ (善良で) ‘clever’ (賢明で) ‘composed’ (落ち着きがあり) ‘firm’ (断固としている)²⁹⁾ と評されている。すなわち、ジェインは確実にベリンダ、エリナ、メアリの系譜に連なっているのである。

にもかかわらず、対照的な印象を読者に与えるのは、ジェインの自立心と向上心ゆえと考えられる。ベリンダらが平穏な家庭生活をめざしたのに対して、ジェインは人間は男女ともに平穏な生活や受け身の生き方には耐えられないもので、能力を生かす活動を必要としているという信念をもっている。

It is vain to say human beings ought to be satisfied with tranquility : they must have action ; and they will make it if they cannot find it Millions are condemned to a stiller doom than mine, and millions are in silent revolt against their lot. Nobody knows how many rebellions besides political rebellions ferment in the masses of life which people earth. Women are supposed to be very calm generally : but women feel just as men feel ; they need exercise for their faculties, and a field for their efforts as much as their brothers do ; they suffer from too rigid a restraint, too absolute a stagnation, precisely as men would suffer ; and it is narrow-minded in their more privileged fellow-creatures to say that they ought to confine themselves to making puddings and knitting stockings, to playing on the piano and embroidering bags. It is thoughtless to condemn them, or laugh at them, if they seek to do more or learn more than custom has pronounced necessary for their sex. ³⁰⁾

才能を生かす機会もなく家庭に閉ざされる女性たちによる「無言の反抗」は、半世紀前のウルストンクラフトの主張がようやく取り上げられる時期を迎えたことをうかがわせる。しかし、ベリンドラにとっては唯一の女性の活動の場であった「家庭」が、なぜジェインにとっては、抑圧の場と見なされたのであろうか。

それは、ジェインが複数の家庭に身を置くことによって、「家庭」は決して対等なパートナーシップを実現する場ではなく、経済状況やジェンダー関係によって序列の決まる不公平な世界であることを体験的に学んだからである。まず、子供時代を過ごしたゲーツヘッド邸では、叔母のリード夫人や従兄ジョンからの虐待や暴力にさらされる。養ってもらっている恩義を受けている以上、従兄妹たちと対等 (equality)³¹⁾と考えてはならず、分をわきまえて謙虚にし、気に入られるよう振る舞わねばならないと繰り返し命じられる。しかも、無一文で自力では生きてはいけないので使用人以下 (less than a servant)³²⁾であると女中たちに言われる。すなわち、経済的に依存している構成員は絶対的服従を要求され、どのような不合理な仕打ちにも耐えなければならないことをジェインは思い知らされるのである。彼女の理性が 'Unjust! unjust!'³³⁾と叫んでも、誰にも省みられることなく暗い部屋にひとりて閉じ込められる。要するに、リスpekタブルな中流階級の家庭は「愛情に満ちた理想の空間」ではなく、「力が支配する理不尽な空間」であることが明らかとなる。

ジェインは自分がスケープゴート³⁴⁾にされたのは、醜くかわいげのない子だったからで、もし可愛くて陽気な子どもだったら少しはましだったろうと考えている。果たして「愛情の対象」となれば対等の関係が築けるであろうか。それが次のテーマとなる。ソーンフィールド邸では、住み込み家庭教師のジェインと雇い主のロチェスターは、立場の違いにもかかわらず、精神的には対等であるとしばしば言及される。ロチェスターはジェインを 'my equal'³⁵⁾と呼び、ジェインも両者の感性や思考が同質であると感じる。にもかかわらず、婚約した途端にふたりの関係が不均衡であることをジェインは思い知らされて、屈辱を味わう。豪華な衣装や宝石を買い与えて未来の妻を飾り立てようとするロチェスターの表情は、「サルタンが美しく飾らせた女奴隷」³⁶⁾を眺める時の視線を思い起こさせ、ジェインは不愉快になり、怒りを覚える。彼女が「天使」³⁷⁾にも「英国版セリーヌ・ヴァランス (かつての愛人)」³⁸⁾にもならないと断言するのは、ロチェスターにとって妻とは完全

に所有して思いのままにできる愛玩物でしかないと気づいたからである。ジェインが婚約中に不機嫌でとげとげしい態度を取るのは、未来の夫に媚びる意志がないことを示すのみならず、夫婦関係に内在するジェンダー構造に対する無意識の抵抗と考えられる。経済的な依存が服従を当然視させることを幼い頃に学んでいるジェインは、少しでも格差を埋めて、適正な関係を築くために思い切った提案をする。結婚後も家庭教師を続けて給料を受け取り、自分の支出はそれで賄いたいと申し出て、好意 (regard) 以外には何も夫から受け取りたくないと言う。しかし、このような必死の試みも、「生意気」 (impudence) 「高慢」 (pride)³⁹⁾ と受け流され、真剣に取り合ってはもらえない。さらに、ジェインは遺産相続人に指定してもらえるよう西インドの叔父に手紙を書く。ささやかであっても独立できる財産が入る見込みがあれば救いになると考えたからである。結局この手紙がきっかけとなって、ロチェスターの重婚の試みが発覚し、ふたりの結婚は阻止されることになる。以上のことから、結果的には「対等の関係」を求めるジェインの意志が、この結婚を拒否したとすることができる。たとえ「愛情の対象」となっても、経済格差がある限り、精神的に同質のふたりでさえも、対等なパートナーシップは実現不可能であることが明らかになったのである。

それでは、経済的に同等で、同じ目的意識をもつ男女ならば対等の関係になりうるであろうか。次の家、ムアハウスではこのような命題に対する解答が得られる。ジェインとセント・ジョンは最も近い境遇にある。従兄妹同士で、性格的にも「賢明で落ち着いて断固として、似ている」と言われる⁴⁰⁾。ジェインは叔父から相続した2万ポンドの遺産を3人の従兄姉たちと等分にして譲ったため、経済的立場も同等である。ジェインには餓死寸前のところを3人に救われた恩義があるが、従兄姉たちも財産分与に心から感謝しており、お互いに協調的で対等な関係にあると言える。そして、セント・ジョンは、神の使命を実現するという高邁な目的のために、インドに宣教師として赴任する決心をして、ジェインにも妻として同行を求める。妹としてならば同意するというジェインに対して、あくまでセント・ジョンは妻でなければ不都合だと主張する。なぜなら彼は、「妹ならばいつか誰かに連れ去られるかもしれない。一生効果的に自分の影響下において、死ぬまで絶対に手放さずにすむ助力者」⁴¹⁾を必要としているからだと言う。すなわち、妻とは絶対的な服従に生涯縛られている存在だということになる。ジェインをぞっとさせたこの言葉は、たとえ他のあらゆる点で対等な場合にも、夫婦となれば主従の関係から逃れられず、精神の自律性を保てないことを示している。婚約

時代にロチェスターの言動からも漠然と感じられてジェインを不安に陥れた婚姻関係のジェンダー構造が、セント・ジョンの率直な言葉で明確に示されたのである。

にもかかわらず、なぜジェインは最後にあえてロチェスターを探し当てて結婚したのであろうか。それは、彼の境遇が大きく変化したことによって、新たな関係を作る見通しが得られたからと考えられる。ファーンディーン荘園で隠遁生活を送るロチェスターはかつての傲慢な自信家ではなく、前非を悔いて失意の状態にある。失明し片腕をなくして、人に世話をされる立場になって初めて彼は弱者の気持ちを理解できるようになった。今や独立した財産をもつジェインに求婚する資格がないと恐れるほど、謙虚な態度を示すようになったのである。かつてジェインの嫉妬心をあおるために、ロチェスターが美しいブランシュ・イングラムの気を引く振りをしたように、今ではジェインがセント・ジョンから求婚されたことを話してロチェスターを嫉妬で苦しめることができる。ふたりの立場が逆転したことが明らかである。この小説は、家庭内での対等なパートナーシップを実現するためには、女性側の独立した財産と、男性を謙虚に意識改革する災難が必要だという皮肉な結論に至っている。さらに、作者は6年後に出版した最後の小説『ヴィレット』では、最後に婚約者の男性を海難事故で行方不明とし、女主人公はひとりで生きていくという、一層悲観的な結末としている。家庭における対等なパートナーシップなどありえず、女性が自律的に生きるにはひとりで自活する他にないという認識が19世紀半ばに生きたシャーロット・ブロンテの本音であったと考えられる。

2) エリザベス・ギヤスケル『ルース』 *Ruth* (1853)

シャーロット・ブロンテの小説はジェンダー間の経済格差と支配構造を明らかにしている点が画期的であったが、登場人物は同じ中産階級内の男女に限定されていた。ここでさらに階層差が加わると、「持てる者＝男性」と「持たざる者＝女性」の格差は一層拡大され、過酷な状況が生まれる。ギヤスケルが『ルース』で描いたのは、ジェンダーと階級の二重構造で縛られた女性の苦闘である。「未婚の母」を取り上げたこの小説は、当時も議論的となったが、「結婚による家庭的幸福」から閉め出された女性がどのような選択をするか興味深い例を提示している。

農夫の娘ルース・ヒルトンは12才で母を15才で父を亡くし、孤児となっ

て、町の婦人服店にお針子見習いとして年季奉公する労働者階級の女性である。ルースの美貌と素朴さに魅せられるヘンリー・ベリングラムは名門の出で裕福な身の上であり、ふたりの間には大きな格差がある。ルースが婦人服店から追放され、頼る人もなく立ち往生した時に、ベリングラムは力になると慰めてロンドンに連れ去り、ルースは典型的な「転落した女」の道筋を辿ることになる。それをはっきりと自覚したのは、ベリングラムと滞在した北ウェールズであった。散歩中に声をかけた少年に殴られ、「悪い女」⁴²⁾と罵られた時、自分の立場と社会的評価を悟ったのである。同じ内縁関係にあってもベリングラムが非難を受けることはなく、性モラルの二重基準が明白である。ルースは自分の立場を恥じ悲しんでいたが、ベリングラムへの愛情だけを心の支えにしていた。他方、睡蓮の花をルースの髪に飾るベリングラムは、「新しいおもちゃで遊ぶ子どものように喜び」、彼がいとしく思うのは「彼女の美しさだけ」⁴³⁾であった。それゆえ、彼がやがて旅先で重病に罹った時に、面倒な展開を悔やんで、駆けつけた母親の説得に応じて後始末を一任し、ルースを平然と置き去りにするのも当然と言えよう。ベリングラムは自分がルースの「道を誤らせた」⁴⁴⁾ことを自覚しているにもかかわらず、きわめて無責任な態度を取りえたのは、もともと一時的な愛玩物として扱える気楽な相手であったためである。自分よりはるかに格下の階層に属している女性に対して、当時のジェントルマン階級の男性が持っていた意識と行動パターンの典型と言えるであろう。母親も同じ階級意識を共有しており、「息子を誘惑した悪い娘」に更生を勧める手紙と手切れ金で後始末をするだけで十分と考える(後にお金は送り返される)。

絶望のあまり自殺を試みたルースを助けて適切な保護を与えるのは、子どもの頃の事故がもとで背中に障害をもつ非国教会の牧師サースタン・ベンスンである。彼は、ルースの妊娠を知って子どもの存在が立ち直るきっかけになると考えず。私生児の誕生を救いがたい罪として嫌悪した当時の倫理観からすればきわめて大胆な発想である。彼は女きょうだいのフェイスと協力して、ルースを遠縁の未亡人デンビー夫人として同居させ、彼女の人柄を信頼してやがて町の裕福な実業家ブラドショー家の家庭教師として推薦する。女性のわずかな性的逸脱でも救いがたい罪と見なした時代に、未婚の母がジェントルマン階級の家庭教師となるという展開は画期的と言えるであろう。16才の時の過ちにもかかわらず、ルースは「純粹で信頼に値し、思慮深い」⁴⁵⁾とされ、雇い主の期待に応える働きぶりを示す。しかし、それ以上に注目すべきなのは、約9年後にルースがかつての誘惑者と偶然再会し、さらに彼の

求婚を拒絶する点である。

財産相続に伴ってダンと改名したベリングラムが、国会議員に立候補して偶然ルースの雇い主の家に現れた時、彼女は激しく動揺し、まだ彼を愛していて忘れることができないと思う⁴⁶⁾。しかし、かつての関係が彼の意志と行動によって解消されたのだから、今後の関係を拒否する権限は彼女の側にあると考える⁴⁷⁾。一方、ベリングラムの方はこれまでルースの身の上を考えたこともなかった。自分が薄情にも捨てた女性の不愉快な結末を知りたくなかったからである⁴⁸⁾（恥辱の死以外には普通ありえない）。しかし、再会の驚きに続いて彼女の美しさや毅然とした態度に魅せられ、さらに息子の存在を知るに及んで、執拗に復縁を迫る。息子に最高の教育を受けさせるという提案は、ルースにとっても抗いがたい魅力であったに違いない。にもかかわらず、彼女は終始拒絶の態度を崩さない。それは、ベリングラムが示すのは相変わらず誘惑者の態度であり、ルースの苦悩や罪の意識を全く理解することなく、ただ自分の欲しいものを手に入れるために有利な条件を提示しているにすぎないからである。彼は、富と階級的優越感に加えて、ルースの弱みを握っていることで、「無力な女」を思うままにできると考えて、彼女に屈辱を与える。‘Are not you afraid to brave me so? . . . Don’t you know how much you are in my power?’⁴⁹⁾「私にそんなに逆らうことが怖くないのか? . . . どれほど私の思いのままになるか知らないのか?」という脅迫めいた言葉は、ルースがかつて抱いていた愛情を完全に消失させるに充分であったに違いない。彼女の拒絶は、虐げられた者が自己の尊厳を守るための意思表示であったと考えられる。

その後、噂から彼女の過去が発覚して謹厳な雇い主に罵られ、家庭教師の職を追われた失意のルースは、町にチフスが流行した時に看護婦として勤めることで自分を取り戻す。やがて、ベリングラムがチフスに罹ったと聞いて、ルースは看護を志願し、3日間献身的に付き添い、ようやく患者は回復に向かうが、ルースの方は感染して亡くなる。彼女はなぜ4年前に拒絶したベリングラムの看護をあえて志願したのだろうか。医者の質問に対して、ルースは息子の父親だと打ち明け、「もし彼が健康で幸福だったら愛さなかったでしょう。けれども病気でひとりぼっちなら世話をせずにはいられない」⁵⁰⁾と答える。ここで、初めてルースは自分の意志でベリングラムに恩恵を施す立場に身を置いたのである。この自己犠牲的行為は、彼女の意識の中では、13年前に罪悪感に苛まれながらもベリングラムの言うままになり、その後長く後悔と苦悩の年月を過ごしてきたことへの贖罪とともに、自尊心の回復を可能にす

るものであったと想像される。

『ルース』が画期的なのは、「転落した女」が恥辱の死ではなく、町の人々に惜しまれて亡くなるという展開に加えて、ルースが明らかに有利な結婚を拒絶する点である。『パミラ』はB氏の誘惑に乗らず、求婚には応じて破格の階級的上昇を果たすが、ルースはその逆のパターンを取るにもかかわらず、名誉を回復する。彼女はベリングガムの態度と言葉から、結婚が家庭的幸福を約束する安定的な関係ではなく、優越的立場にある男性が望むものを手に入れるための手段にすぎないと悟る。ベリングガムは復縁を迫った時、初めは内縁関係を復活させる提案をしており、相手が応じないとわかると、結婚を口にするのである。結婚は内縁関係の延長線上にあることが明らかである。ルースはそのような屈辱的な関係には二度と陥らないと決心している。女性にとって結婚が唯一の生活手段であり、目標であった時代に「結婚を拒絶する女性」を描いたことは意義深い。しかも、看護婦としての活動が認められて、病院と医師会から感謝状が贈られることからわかるとおり、ルースは見事に社会復帰を果たしたのである。その後、自分の転落と恥辱の原因となったベリングガムの看病をすることで、ルースは宗教的な自己犠牲までも示し、自分の生命という大きな代償を払うことで、ベリングガムをはるかに越える人間性を証明したと言えるであろう。

『ジェイン・エア』と『ルース』はいずれも女主人公が社会的上昇を可能にする結婚を拒絶する点が共通している。それは、男性側が倫理的な水準においてははるかに劣り、特に婚姻外の関係に寛容で、女性側には受け入れがたい優越的な態度や意識を示し、男女間に越えがたい価値観の乖離が認められるからである。また、男性が事故や病気など身体的な試練にさらされる点も見逃せない。例えば、ジェイン・オースティンの小説では病気に罹ったり事故に遭うのは女性で、(『分別と多感』のマリアン、『高慢と偏見』のジェイン、『説得』のレイザーなど) 身体的弱さや思慮の欠如を表している。ロチェスターやベリングガムの場合にも事故や病気は、不注意や無責任さ、もしくは人間的弱さを暗示する機能をもつと考えられる。また、社会的な地位や身体的優位性を失って、無力になる体験は、他人に頼らざるを得ない状況に身を置くことを意味し、女性の立場を擬似経験することでもある。その試練からロチェスターは再生したが、ベリングガムは何も学ばなかった。社会的、経済的にはるかに優位にある男性が、倫理的にも身体的にも重大な弱点をもち、責任を果たしていない以上、結婚による「家庭的幸福」という1810年

代の神話も崩れざるを得ない。ジェインの遺産相続による自立やルースの自己犠牲による贖罪という、現代の読者から見ればいくぶん不自然な結末は、閉塞状態の社会に生きた女性たちにとって、自分の意志や価値観を表すやむをえぬ手段であったと考えられる。

4. 19 世紀後半（1860 年代初め）

1) ヘンリー・ウッド夫人『イースト・リン』 *East Lynne* (1861)

中産階級の女性に経済的自立の手段がなく、男性に依存せざるを得ない当時の社会では、結婚により安定的な生活を手に入れられるかどうか死活問題であった。したがって、生き方の役割モデルを提示する機能を果たした小説において、女性が主人公であれば「幸せな結婚」で終わるパターンが、コンヴェンションとなったのは当然と言えよう。結婚は到達目標として認識されていたために、小説がその先、つまり結婚生活の内部まで描くことは稀であった。あくまで女性は妻となり母となった後には満足して、充実した幸福な歳月が約束されていると見なされていたのである。しかし、実は女性の領域とされた家庭は決して女性の能力を活かす場ではなく閉塞的な場所で、むしろ女性たちは密かにそこから逃げ出したいという幻想を抱いていたという実状が、『イースト・リン』の桁外れの成功からうかがい知ることができる。

マウント・セヴァーン伯爵の一人娘レディ・イザベルは、借金だらけの父の死後、無一文になるが、自宅イースト・リン邸を買い取った近隣の弁護士カーライルと結婚する。「尊敬はするがまだ愛するまでにはなっていない」⁵¹⁾とイザベルは正直に打ち明けるが、親戚宅で肩身の狭い思いをしていただけに、親切で良識ある紳士の求婚を拒否できるはずもない。3人の子どもに恵まれ、結婚生活は順調に見えたが、優しく臆病で繊細なイザベルは家庭内でほとんど実権をもてない。同居している夫の異母姉コーネリアが家政を取り仕切り、節約に努めて、嫌がらせや当てこすりでイザベルはいたたまれない。夫はこれまで姉に任せていたので気にもしない。その上、近隣に住む判事の娘バーバラが夫と頻繁に会っているのを知って嫉妬に苦しむ。実はバーバラは殺人犯の疑いをかけられて逃亡中の兄リチャードの件で、カーライルに相談していたのだが、それを知らないイザベルはバーバラが以前から夫と親しかったという話を女中から聞いて動揺する。そこにつけ込んだ放蕩者のフランシス・レヴィソンは、ふたりの仲について嘘を並べ、イザベルを

巧みに誘惑する。ついにイザベルは置き手紙を残して家出し、レヴィソンと大陸に駆け落ちするが、すぐに後悔する。やがて不実なレヴィソンに捨てられ、列車事故に遭って私生児を失い、自分も重傷を負う。その後は変わり果てた姿で住み込み家庭教師となって自活する他ない。数年後、置き去りにした子どもたちへの愛着を絶ちがたく、イザベルはかつての自分の邸イースト・リンの家庭教師として密かに戻ってくる。そこではバーバラと再婚したカーライルが幸せな結婚生活を送っている。母親と名のれないことに苦しみ、自分の失ったものの大きさに呆然としながら、ひたすら耐える。やがて献身的な看護の甲斐もなく長男を結核で亡くし、急速に衰弱したイザベルはカーライルに許しを請うて静かに亡くなる。

イザベルの結婚生活の破綻と、近隣の殺人事件の犯人探しというふたつの出来事が平行して進む展開はテンポもよく、読者を飽きさせない巧みな語りで、およそありそうにない後半部の設定もそれなりに受け入れられる。作者はあくまで、既婚女性の貞節と評判がどれほど大切かを強調し、一時の気の迷いや不満から取り返しのつかない愚行に陥る危険を避けるようにと警告する保守的な態度を一貫して崩さない。「家を飛び出したい気持ちになることがあっても、目を覚ましなさい。結婚生活がどんなに苦しくても一うち砕かれた心には耐え難いと思われるだろうが、一耐える覚悟をなさい・・・評判と良心を失うことは、死よりもひどいことだから」⁵²⁾しかしこの一節から、どれほど多くの妻や母たちが、耐え難い結婚生活から逃れるために家から脱出する幻想に耽っていたのかが推測される。イザベルの結婚生活の不満についても作者は厳しくたしなめている。「結婚後1年は夫も愛情深かったが、やがて冷淡になっていった。子どもでもお気に入りの玩具に飽きるのだから、まして男性とは気が変わりやすい気質なので、自分が主人になれば以前ほどの情熱を示さなくなっても当然なのだ」⁵³⁾と説明している。作者は夫の無関心を不満に思う妻に忍耐の必要を忠告しながら、夫婦の実態を正確に描いている。妻は夫にとって新しい玩具のようなものに過ぎず、飽きられても文句を言う立場ではないということだ。そして妻の座は容易に代わりが見つかり、いったん手放せば、イザベルのように後悔と羨望に苛まれる結果になるのである。家庭教師として戻ってからのイザベルは、自分が捨てたものの価値にどれほど無自覚だったかを思い知らされる。夫への愛情も感じるようになるが、時すでに遅く、今や別の女性が妻の座を占めて仲睦まじく暮らしているのを傍観する立場である。おそらく読者も捨てる覚悟のできない自らの結婚生活の価値を再認識して、慰めとしたことであろう。『イースト・

リン』が版を重ねて50万部を超えるほどの驚異的なベストセラーとなった背景には、「結婚生活には忍耐が必要で、妻の評判と良心は何よりも大切」という教訓的なメッセージを提示する一方で、美しく心優しい女主人公が子どもを置き去りにしても家を飛び出したいほどのストレスにさらされているという現実と、道ならぬ恋をして駆け落ちするような心躍る冒険に身を任せたいという夢が、ひろく女性たちに共有されていたと推察される。そして家庭以外に生存の手段を持たなかった中産階級の有閑女性たちにとっては、煽情小説に読みふけることがささやかな逃避と抵抗の手段であったに違いない。

2) メアリ・エリザベス・ブラッドン『オードリー卿夫人の秘密』

Lady Audley's Secret (1863)

「煽情小説」は、それまで小説が決して描こうとしなかった中産階級の女性の本音、すなわち、女性たちが娘、妻、母という女性の役割を実は嫌悪し⁵⁴⁾、あらゆる手段を使っても家庭から逃げ出したいという密かな願望を抱いていることを、初めて暴き出した点が画期的であった。さらにこの作品は、女性は美しく、心優しく、か弱く無力であるという固定的なイメージを覆している点が注目に値する。女主人公は、色白、金髪、小柄、華奢で美しく、少女のように清楚な外見を備えながらも、生活の安定と社会的上昇を実現するために、重婚や夫殺害（未遂）、放火など犯罪行為を次々と実行する、大胆不敵な策略家である。

オーストラリアで金鉱を掘り当てたジョージ・トルボイズは3年半ぶりに帰国し、イートン時代の同窓生ロバート・オードリーと偶然再会する。ジョージは置き去りにした妻ヘレンを探すか、まもなく新聞で死亡記事を見つける。落胆した彼は墓参りの後、誘われるままにロバートの伯父の地所を訪問するが、突然行方不明になる。ロバートは友人失踪の謎を追ううちに、伯父オードリー卿が最近再婚した若い妻ルーシーが実は死んだはずのジョージの妻なのではないかと疑い始める。その後はロバートとルーシーの必死の攻防が続く、やがて追いつめられて覚悟を決めたルーシーは、自分の生い立ちと母親の狂気について告白する。さらに、オードリー卿との結婚直後、夫ジョージの帰国予定を新聞で知り、自らの死亡偽装工作をしたこと、さらに、それをジョージに責められて古井戸に突き落としたことを認める。ロバートは伯父の依頼でルーシーをベルギーの精神病院に入院させる。一方、古井戸に

落とされたジョージは、大怪我をしたものの自力で脱出し、近くの宿屋で密かに手当を受けて、妻とロバート宛の手紙を託し、迷惑がかからぬよう偽名で海外に渡航していたことがわかる。手紙を預かった宿の主人が脅迫の種にできると隠し持っていたために、真相が関係者に知らされなかったのである。やがてジョージは帰国し、ロバートはジョージの妹と結婚して3人で暮らす。ルーシー（ヘレン）は入院の翌年に亡くなる。

最初の推理小説と称されるように、手紙や筆跡、暖炉で燃やされた電報の断片、手首のあざ、かつての大家の証言など、さまざまな状況証拠を積み重ねて真相に迫る過程は、重婚、死亡偽装工作、殺人未遂、放火などのセンセーショナルな行動とともに、読者を引きつけて離さない。そして、悪は滅び善が勝利する「正しい結末」に向かって進む巧みな語りも快感を与えてくれる。しかし、ヘレンの側から見ると、もうひとつ別の物語が見えてくる。

海軍に勤務する父親が不在がちで気性の激しい女性に預けられたヘレンは、幼い頃から貧困の苦しさを実感して育つ。10才の時に精神病で入院中の美しい母親に会って衝撃を受ける。成長するにつれて彼女も美人と言われるようになり、人生は結婚次第だと知ってからは、結婚によって貧困から逃れることを切に願う⁵⁵⁾。しかし、最高の美人でも裕福な夫を手に入れるのは容易でないことを悟る。17才の時、近衛騎兵連隊に所属するジョージが現れ、ヘレンを愛し結婚する。ふたりは1年間大陸で贅沢な暮らしをするが、無一文の女性と結婚したためジョージは父親から勘当されてしまう。帰国すると資金は底をつき、夫への愛も醒め、ジョージも不機嫌になる。再び貧困に追いつめられて夫を非難すると、ジョージは運を試してみるとの置き手紙を残して旅立つ。ヘレンはやむなく生まれた息子を父親のもとに残して、新聞の求人欄に応募し、ルーシー・グレアム名でロンドンの学校で助教員として2年近く働く。やがてエセックスの医師宅に住み込み家庭教師として赴任し、翌年、地元の名士サー・マイケル・オードリーに求婚されると、3年間も音信不通の夫ジョージはもう亡くなったものと判断して、応じる。こうしてヘレンはようやく念願の裕福な生活と高い社会的地位を手に入れ、満ち足りて夫に感謝し、他人にも慈悲深く振る舞えるようになる。ところが、結婚1ヶ月あまりでジョージがオーストラリアから帰国する予定との新聞記事を見る。父親の元にはジョージからの手紙が転送されて届いていた。慌てたヘレンは、船が英国に到着する数日後に自分の死亡記事を新聞に掲載することにし、さらに息子の世話をしていた女性の長女が結核で危篤状態と知って、自分の身代わりとして転地療養させ、まもなく亡くなるとヘレン・トルボイ

ズとして埋葬させる。手の込んだ偽装工作にもかかわらず、ジョージは妻を探し当て、密かに会いに来てヘレンを激しく非難し、サー・マイケルに真相を知らせると脅す。恵まれた立場を守りたい一心で、ヘレンはジョージを寄りかかっていた古井戸に突き落とす。さらに父親に電報で指示して、ジョージが息子に別れを告げに立ち寄った後、オーストラリアに向けて出航したように口裏を合わせる。ロバートに追いつめられて、これまでの経緯を告白した時、母親から受け継いだ狂気に時々襲われると説明し、精神病院に強制入院させられ、翌年亡くなる。

女性が自力で貧困から脱出するという最も困難な試みは、裕福な男性の愛情を獲得することでしか実現しない。その唯一の手段によってヘレンは、自分の人生を切り開き、社会的上昇を果たす。愛情より野心や自己実現を優先する姿勢は、心優しく、か弱いとされた女性像を覆す。しかし、女性にとって他に貧困から逃れる方法がないのであれば、ヘレンの行動を一概には責められないはずである。貧困に甘んじるべきだとは強制できないであろう。オードリー卿とロバートに向かって、彼女は次のように語りかける。「あなたがたは裕福な人生を歩まれてきたので、私を軽蔑なさる立場にいらっしゃる。けれど、貧困がどれほど人生を蝕むか私は知っていましたし、蝕まれた人生を病的に恐れていたのです」⁵⁶⁾ この言葉は、持てる者の持たざる者への軽蔑を告発する、痛烈な皮肉になっている。ヘレンに極端な犯罪行為を促したのは、女性に経済的自立の手段を与えない社会システムにも一因がある。ヘレンの言葉によれば、「愛こそ狂気の愚行」⁵⁷⁾であり、自分には縁のないものだったという。「愛」を「結婚」の基盤とした近代以降の家族制度そのものへの疑問すら感じ取れる。男女の経済的立場がかけ離れている社会状況では、「愛」よりも「貧困からの脱却」という差し迫った必要が、女性にとっては優先的な課題とならざるを得ないのである。

さらに、女性らしい優雅な外見のヘレンが、ロバートと対等の知力や実行力をもつ点は女性のイメージを大きく変えている。彼女は、ルーシーとヘレンが同一人物であるという証拠をロバートに突きつけられてもひるまず、逆にロバートの狂気を夫に信じ込ませて精神病院に送ろうとするほど強気で自信に満ちている。にもかかわらず、放火によるロバート殺害に失敗すると、あっさり真相を告白する。これは、自らの敗北を素直に認めて反省したというより、むしろ、即座の判断で刑務所より精神病院を選んだためではないか。狂気ゆえの行動とすれば、責任を問われずにすみ、恥辱を免れることができる。当時、狂気は女性特有の症状と考えられ、女性の逸脱行動は狂気と

見なされた。一方、相談を受けた専門医は、一連の行動は筋が通っていて、冷静さと慎重さが認められ、狂気の兆候は見られないと判断している⁵⁸⁾。しかし一族の不名誉にならぬよう密かにベルギーの精神病院を紹介する。ヘレンはそれを見越して、計画を変更し狂気を主張したのではないか。彼女は持てる限りの贅沢品を荷造りさせて精神病院に入り、その後おそらくは阿片により自殺したと考えられる。自分の最後まで周到に計画し、実行したのである。とすれば、表向きはロバートの勝利であるが、実はヘレンの方が知恵において勝っていたとも考えられる。題名の「オードリー卿夫人の秘密」とは、重婚や夫殺害未遂などではなく、「夫人は正気であり、しかも当時の女性を代表している」⁵⁹⁾ ことだというエレイン・ショーウォルターの指摘はこの小説の隠れたテーマを正しく言い当てている。このような衝撃的な現実が巧みに描かれているのである。

また、この作品が画期的なのは、女性の本音が描かれているだけでなく、男性側の本心である女性嫌悪が巧みに表現されている点も挙げられる。400ポンドの年収をもつロバートは仕事もせず怠惰に暮らす気楽な人物であるが、ジョージが姿を消してから、一転して精力的に謎解きに取り組んで、ルーシーを執拗に追いつめていく。これは、友人に対するいささか度を超した愛着に加えて、根強い女性嫌悪が背景にある。女性は決して怠惰であったり、静かであることがないと、ロバートは嘆き、次のように考える。

To call them the weaker sex is to utter a hideous mockery They are the stronger sex, the noisier, the more persevering, the most self-assertive sex. They want freedom of opinion, variety of occupation, do they? Let them have it. Let them be lawyers, doctors, preachers, teachers, soldiers, legislators--anything they like--but let them be quiet--if they can. ⁶⁰⁾

この一節には、活動の場を家庭に限定された女性の欲求不満に対する警戒のみならず、女性の潜在的能力への反感と女性嫌悪が明らかにされている。さらに、「女性役割」に不満な女性たちの焦りや憤りもまた、間接的に伺い知ることができる。すなわち、ロバートによるルーシー弾劾は、「女性のあるべき姿」に抵触した女性に対する、狂気という烙印による社会的抹殺の過程でもあると考えられる。

以上のように、煽情小説は極端な状況や逸脱した女性像を描いてエンター

テインメントに徹しているように見えながら、実は、当時に女性の本音や社会の現実を余すところなく描いている。主人公の女性たちは、18世紀末に大流行したゴシック・ロマンスの女性たちのように身体的な暴力や殺害の恐怖に怯えることはないが、より巧妙で手の込んだ精神的抑圧に苦しめられており、その結果、極端な行動に走る。カーライル、ジョージ・トルボイズ、ロバート・オードリーら主な男性の登場人物たちは、いずれも正義感が強く誠実であるが、それだけにかえって独善的になりがちで、女性たちを救いがたく追いつめていることに気づかない。言い換えれば、安全な場所、安泰な立場から、女性たちの「不正」を厳しく断罪する「正しい」男性たちの身勝手さ、無神経さをかいま見ることができると言えよう。したがって、煽情小説の「正しい人々には平安が訪れる」というありきたりの結末も、アンビヴァレントな響きを潜ませている。一見単純に見えるこれらの小説は、保守的で無難な結末の背後に割り切れない思いを潜ませている。このような語りの重層性が、破格の大成功を導いた一因でもあったに違いない。

5. 結 語

以上のように、19世紀初めからヴィクトリア朝半ばまでの約60年間にわたって、当時高い評価を受けた作品もしくはベストセラー作品を中心に、女性像の変化を眺めてみた。18世紀には「エヴァ→マリア」の逆転現象が起こったが、19世紀に入ると「マリア」像はさらに洗練されていったと言える。知的で賢明な女性像が1810年代の小説には繰り返し描かれ、前世紀の感性重視とは決別して「知性」と「自制心」を重視する傾向が顕著に見られる。また、結婚生活における男女の対等なパートナーシップが理想とされ、女性の高い美德が家庭内での立場を安定的なものにすると考えられた。しかし、このような理想主義的な婚姻関係は、次第に非現実的なものとして退けられていく。1850年前後の小説では、結婚の実態もしくは男性側の倫理感の欠如が指摘され、社会的、経済的な安定を約束する結婚を拒否する女性たちが主人公として描かれるようになる。ジェイン・エアやルース・ヒルトンは、結婚による生活保障より、ささやかながら自活することで人間としての尊厳を維持するという画期的な選択をしたのである。そして60年代に入ると、女性が「ひそかに家庭内での役割を嫌悪している」という本音を、間接的ながら表現できるようになってきたことがわかる。とは言え、それはあくまで煽情小説という「大衆文学」の中で初めて可能になったことではある

が。それまで、女性の激しい怒りや不満は、『ベリンド』のフリーク夫人や『ジェイン・エア』のバーサなどのように、変人や狂人として脇役に振り当てられていた。女主人公が、家を飛び出したり夫を殺害したりするなど激しい不満や怒りを行動に表す設定は、社会的制約に閉ざされていた女性たちのひそかな願望充足の役割を果たしたと考えられる。これが一時期の流行で終わらなかったことは、後に煽情小説の筋立てが純文学の領域にも影響を与えたことから明らかである。例えば 1876 年に出版されたジョージ・エリオットの『ダニエル・デロンダ』では、女主人公グウェンドレンは冷酷な夫から耐え難いほどの心理的虐待を受け、殺意を抱くほど夫を憎み、ヨットの事故であえて夫を助けなかったことで罪悪感に苛まれる。このような結婚生活の実態を描くことは煽情小説が初めて可能にしたのである。

19 世紀の初めには、結婚による理想的な家庭の実現で終わっていた小説が、半世紀後には、結婚こそが男女の不公平な関係を固定化するシステムであることに気づいた女性を登場させ、やがて結婚生活から逃れようとする女性たちを描くまでに、劇的に変化していったことがわかる。それに伴って、女性のイメージも知的で思慮深い理想化されたものから、ささやかな経済的自立と個人の尊厳を求めて苦闘する姿へ、さらには、現状への不満や憤りを極端な形で行動に表すまでに、変わっていった。

しかし、実際には結婚せずに中流階級の女性が経済的に困窮せずに生きていくことは至難の業であった。ジェイン・エア以降の女性たちがいずれも「ガヴァネス」と呼ばれる住み込み家庭教師を経験していることは、いかに女性に開かれた活動の場が社会に存在しなかったかを物語っている。ガヴァネスは女性役割の延長と見なされる仕事で、中産階級の女性が「墮落」することなく収入を得ることができるほとんど唯一の職と考えられていた。しかし、その実態は年収 20～30 ポンドほどのわずかな報酬で⁶¹⁾、教育のみならず、子守や裁縫まで任され、ロチェスターの言葉によれば「奴隷状態」⁶²⁾と見なされる仕事であった。シャーロット・ブロンテや妹アンはいずれもガヴァネスを経験し、その屈辱的な立場や過酷な労働について手紙や小説の中で詳しく述べている。また、ルースが看護婦として活躍することは、その後のフローレンス・ナイティンゲールのめざましい活動を予兆する意味でも興味深い。「看護」という女性役割の延長ではあるものの、女性が家庭の外で社会的に意義のある仕事をするきっかけを提示している。

1851 年の英国の国勢調査によれば、20～40 才の女性の 42% が未婚であったという⁶³⁾。当時の女性にとって未婚はすなわち貧困化を意味している。ジ

ェインやルースのみならず、経済的自立を余儀なくされた女性たちが数多く存在したはずである。一方で良妻賢母を女性の唯一の「正しい」生き方と規定したイデオロギーは19世紀を通じて健在であった。しかし1850年前後から、それを疑問視する声が着実に女性たちの間から漏れ聞かれるようになり、女性像も大きな変化の兆しを見せていることがわかる。

注)

- 1) cf. 「女性はどうのようにイメージ化されてきたか (3) —18世紀英国 小説に描かれたジェンダー観—」『飯山論叢』第19巻第1号, pp.30-58, 東京工芸大学女子短期大学部, 2002年1月。
- 2) Edgeworth, Maria. *Belinda*. 1801, Everyman Library, Dent (1993), pp.358-9.
- 3) *Ibid.*, p.204.
- 4) *Ibid.*, p.32.
- 5) *Ibid.*, p.246.
- 6) *Ibid.*, p.240.
- 7) *Ibid.*, p.394.
- 8) *Ibid.*, p.401.
- 9) 都留信夫編著『イギリス近代小説の誕生』ミネルヴァ書房, 1995年, p.270.
- 10) Edgeworth, *op.cit.*, p.214.
- 11) Austen, Jane. *Sense and Sensibility*. 1811, Penguin English Library (1969), p.143.
- 12) 13) *Ibid.*, p.149.
- 14) 15) *Ibid.*, p.158.
- 16) *Ibid.*, p.263.
- 17) *Ibid.*, p.55.
- 18) ブリジェット・ヒル『女性たちの十八世紀』(1984) みすず書房 1990年, p.77.
- 19) アメリカ人ギルバート・イムリーとの内縁関係や未婚での出産, 2度にわたる自殺未遂などが非難の的となった。
- 20) Barker-Benfield, G.J. *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain*. U of Chicago P., 1992, p.368.
- 21) ブリジェット・ヒル『前掲書』p.82.
- 22) 都留信夫編著『前掲書』p.263.
- 23) Mellor, Anne K. *Romanticism & Gender*. 1993, Routledge, p.59.
- 24) ブリジェット・ヒル『前掲書』p.79.
- 25) Brontë, Charlotte. *Jane Eyre*, 1847 Penguin English Library (1966), p.174.

- 26) *Ibid.*, p.177.
- 27) *Ibid.*, p.230.
- 28) *Ibid.*, p.293.
- 29) *Ibid.*, p.401.
- 30) *Ibid.*, p.141.
- 31) *Ibid.*, p.45.
- 32) *Ibid.*, p.44.
- 33) 34) *Ibid.*, p.47.
- 35) *Ibid.*, p.282.
- 36) *Ibid.*, p.297.
- 37) *Ibid.*, p.288.
- 38) 39) *Ibid.*, p.298.
- 40) *Ibid.*, p.394.
- 41) *Ibid.*, p.431.
- 42) Gaskell, Elizabeth. *Ruth*, 1853, Oxford World's Classics (1985), p.72.
- 43) *Ibid.*, p.74.
- 44) *Ibid.*, p.88.
- 45) *Ibid.*, p.199.
- 46) *Ibid.*, p.274.
- 47) *Ibid.*, p.284.
- 48) *Ibid.*, p.278.
- 49) *Ibid.*, p.300.
- 50) *Ibid.*, p.441.
- 51) Mrs. Henry Wood, *East Lynn*, 1861, Everyman Classics, Dent (1984), p.123.
- 52) *Ibid.*, p.289.
- 53) *Ibid.*, p.201.
- 54) Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own*, 1978, Virago Press, p.158.
- 55) Braddon, Mary Elizabeth. *Lady Audley's Secret*, 1863, Oxford World's Classics (1987), p.350.
- 56) *Ibid.*, p.351.
- 57) *Ibid.*, p.354.
- 58) *Ibid.*, p.379.
- 59) Showalter, *op.cit.*, p.167.
- 60) Braddon, *op.cit.*, p.207.
- 61) 家政婦の年収が 24 ギニー (1 ギニーは 1.05 ポンド)とされるので、使用人とほぼ同等と見なされていることがわかる。cf. Nancy Armstrong, *Desire and Domestic Fiction*, 1987, Oxford U. P., p.85.
- 62) Brontë, *op.cit.*, p.298.
- 63) Poovey, Mary. *Uneven Developments : The Ideological Works of Gender in Mid-Victorian England*. U of Chicago P, 1988, p.4.